選択的友人関係志向が孤独感、ソーシャル・サポート、自己決定意識に及ぼす影響の検討

松尾由美（お茶の水女子大学） 安藤玲子（お茶の水女子大学） 坂元章（お茶の水女子大学）

キーワード：選択的友人関係・自己決定意識・ソーシャル・サポート

問題
昨今の若者は友人との深い付き合いを避け、表面的で軽薄な友人関係しか築けない傾向にあるという調査が多く見られる。このような調査に対し、若者の友人関係は浅いのではなく、趣味や興味に基づき、状況や目的に応じて選ぶ相手を選ぶような選択的な関係を望む傾向にあり、またこのような関係はどの世代にもあってはまることが指摘されている（松田，2000）。このような関係を志向する者は、状況に応じて選んだ相手と深い関係を築いているので、仮想界や孤独感は逆にむしろ充実感を感じているのだという主張がなされている（辻，1999）。一方で、選択的友人関係のみを経験し、どんな状況でも同じ人と付き合い、互いを知り尽くした全面的な友人関係の経験が少ないことで生じる問題点も指摘されている。小林（2001）は選択的な友人関係ばかりを経験すると、状況や目的ごとに他者と接するので1人の人間の様々な面を理解する経験に欠けるため、自分を相対的に評価できず、またその状況以外で相手が何を考えているのかわからないので不安が強くなり主張している。深い関係を経験しても、全面的ではなく、部分的な関係では、悪影響を及ぼす可能性が懸念されている。

このように、選択的友人関係志向が及ぼす影響について、肯定的な見方と否定的な見方があるものの、これらを客観的に検討した研究は見当たらない。そこで本研究では、選択的友人関係志向がどのような影響を与えるのかを明らかにする目的を以って、選択的友人関係志向が、孤独感、自己決定意識、ソーシャル・サポートに与える影響について因果関係を検討する。小林（2001）の主張が正しければ、選択的友人関係志向が高い者は、相手が何を考えているのかわからない不安が強いので、孤独感が高くなり、ソーシャル・サポートも感じにくいと予測される。また、他者の限られた側面のみに接し、自分を相対的に評価することができないことから、何かを決める際も自分自身の決定が正しいか判断できないので、自己決定を望まない傾向にあると予測される。

方法
調査参加者と調査時期
関東の7つの大学の学生を対象に、同一の質問紙を利用した調査を2度行い、両調査に参加した137名（男性63名、女性74名、平均年齢19.5歳）を分析対象とした。質問紙は授業内に配布し、その後で回収した。第1回調査（T1）は2002年7月、第2回調査（T2）は2002年10月に実施した。

質問紙の構成
性格や年齢、大学名、居住形態を尋ねた他に、以下の内容などから構成された。
1. 友人関係志向：選択的友人関係志向に関する11項目（例：何をやるのかによって友人を進む）と、逆転項目として全面的友人関係志向に関する8項目（例：どんな顔をしてでも友人がいない）から成る友人関係志向尺度を作成した。回答は6件法であった。SPSS分析を行い不適切な項目を削除した17項目を最終的な友人関係志向尺度に合計点を算出した（α=0.70（T1）、0.72（T2））。再テスト信頼性は、ω=74であった。
2. 孤独感：Russellら（1980）を基に作成されたR Veteran UCLA孤独感尺度改良版（諸井、1991）の20項目を用いた（α=0.92（T1）、0.90（T2））。回答は6件法であり、合計点を算出した。
3. ソーシャル・サポート：「普段から自分を取り巻く重要な他者に愛され大切にされており、もし何か問題が起こっても援助してもらえるという期待の強さ」を測定する学生用ソーシャル・サポート尺度（久田・千田・畑口、1998）の15項目を用いた（α=0.94（T1）、0.96（T2））。回答は6件法であり、合計点を算出した。ただし、複数のサポート源の中で「友人・知人」に対する評定のみを行った。
4. 自己決定意識：自己決定志向性（例：自分のことに思いで決めると思う）・他者決定選好の少なさ（例：あなたのこととは誰かに決めてもらいたい）（逆数項目：以下8と記載）・自己決定の不安の少なさ（例：何かを自分で決めるのは面倒なので好きではない）・自己決定のマイナス感情の少なさ（例：何かを自分で決めるのは面倒なので好きではない）・自己決定の効力感（例：自分で決めてても、どうせ誰かに反対されるとと思）5つの下位尺度から構成される自己決定意識尺度（新井・佐藤 2000）の25項目を用いた（α = .89（T1），.90（T2））。回答は6件法であり、合計点と下位尺度ごとの合計点を算出した。

結果

選択的友人関係志向が孤立感に与える影響

性別、年齢、大学名、居住形態、T1 の孤立感・選択的友人関係志向を独立変数として、T2 の孤立感を従属変数とする重回帰分析を行い、選択的友人関係志向が孤立感に与える影響について因子関係を検討した。分析によって示された標準偏回帰係数を検討したところ、選択的友人関係志向が孤立感に与える有意な効果は見られなかった（β = .07，n.s.）。

選択的友人関係志向がソーシャル・サポートに与える影響

各属性、T1 のソーシャル・サポート合計点・選択的友人関係志向を独立変数として、T2 のソーシャル・サポート合計点を従属変数とする重回帰分析を行い、選択的友人関係志向がソーシャル・サポートに与える影響について因子関係を検討した。その結果、選択的友人関係志向がソーシャル・サポートに及ぼす有意な負の効果が得られ（β = .15, p < .05），選択的友人関係志向が高いとソーシャル・サポートを低めることが示された。

選択的友人関係志向が自己決定意識に与える影響

各属性、T1 の自己決定意識合計点・選択的友人関係志向を独立変数として、T2 の自己決定意識合計点を従属変数とする重回帰分析を行い、選択的友人関係志向が自己決定意識に与える影響について因子関係を検討した。その結果、選択的友人関係志向が自己決定意識に及ぼす有意に負の効果が得られ（β = .13, p < .05），選択的友人関係志向が高いと自己決定意識を低めることが示された。下位尺度ごとに同様の分析を行ったところ、選択的友人関係志向が、他者決定選好の少なさ（β = -.16, p < .05），自己決定のマイナス感情の少なさ（β = -.14, p < .05），自己決定の効力感（β = -.21, p < .01）にそれぞれ有意な負の効果が得られ、選択的友人関係志向が他者決定選好や自己決定のマイナス感情を高め、自己決定の効力感を低めがることが示された。

考察

選択的友人関係志向は孤立感に有意な効果を及ぼさない一方で、ソーシャル・サポートに有意な負の効果を持つことが示された。選択的友人関係は趣味などに基づき各状況で各友人と深く結びつく各趣味に友人を切り替えているので、他者決定の自己決定に影響を与えないと考えられる。しかし、その結果だけでは趣味などに対する友人関係の影響を評価することができず、その結果が正しく単純な友人関係とは限らないことを考慮する必要がある。

引用文献

新井 隆・佐藤 義 2000 児童・生徒の自己決定意識尺度の作成 筑波大学心理学研究 22, 151-160。
久田高・千田隆代・細川郁博 1999 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み(1) 日本社会心理学第30回大会発表論文集 143-144。
小林 正 2001 なぜ、メールは人を感情的にするのか? イメージの心理学 ダイヤモンド社。
松田 美佐 2000 畏者の相互関係と携帯電話利用－携帯電話利用の心理－．心理社。
進大平 1999 若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア 橋本良明・細川郁博・松田美佐 進化便の社会心理学 第3 子供・青少年とコミュニケーション 北沢出版。

謝辞

お茶の水女子大学大成在籍さらには多大なご協力を賜りました。ここに厚く申し上げます。